

# 福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 (財)第五福竜丸平和協会  
〒136 東京都江東区  
夢の島3-2  
都立第五福竜丸展示館内  
電話 03-3521-8494

わが協会が第五福竜丸を展示して、核実験被害の恐ろしさを宣伝し教育しているのは、核兵器の完全な廃絶を願っていることにはかならない。  
展示館は職員の献身的な努力とあいまって、年々見学者が増加し、所期の目的を果たしつつある。しかし、現状で十分とはいえないであろう。核兵器廃絶の国内、国際世論は、最近のフランス、中国の核実験を契機に急速に高まっている。この機に協会も一段と活動力を強化して核兵器廃絶に貢献すべきであろう。私たち理事は、決意を新たにこの難事業に取り組みなければならない。

### 広島・長崎の被爆者と核実験被害者の連帯

廃絶運動は、核戦争被爆と核実験被害の残虐、悲惨を原点とし、再びこの悲惨を人類に与えてはならぬことを世界の人民に広く理解してもらおうことを原点とする。

## 諸悪の根源は核兵器にあり

松井 康 浩

広島、長崎では各一発の原爆によって両市は人も物も壊滅した。これは非戦闘員を殺したり、学校、寺院、病院を攻撃してはならないという国際法に違反する行為であった。

核実験は、実戦において核兵器を効果的に使用することを目的として行われる。アメリカのネバダ、旧ソ連のセミパラチンスクでの被爆者は、何百万人もいると報告され、原水爆禁止世界大会では、広島、長崎の被爆者と実験被害者が連帯して核廃絶と被害者救済のために闘うことが決議された。

ビキニの核実験は、第五福竜丸をはじめ地元住民など広範かつ致命的被害を及ぼし、人に対してのみならず環境の破壊もすさまじく、核兵器は人類と共存できないことを事実をもって証明している。

### 活用すべき国際司法裁判所の勧告的意見

国際世論の高まりの中で、核兵器の

使用と威嚇が国際法に違反しないかを問う国際司法裁判所への提訴が行われ、去る七月八日に勧告的意見が出された。

それは①核兵器の使用や威嚇は一般的に違法である。②ただし国家存亡にかかるといふ時に自衛手段として用いることについては、合法か違法か判断できない。③国連は核軍縮交渉を誠実にを行い、それを完了させる責任がある。というものである。

これに対する評価は、国際司法裁判所への期待の大小によって、かなり分かれているが、核兵器を肯定したもではなく、その廃絶に向けて努力する責任があると宣言したことを、今後の運動に活用すべきであろう。

### 沖縄の核基地強化に抗して

五〇年にわたる核軍拡競争によって、一度核戦争となれば、人類は絶滅し、地球は破滅するという現状にある。巨額な経費をとまなうためソ連は崩壊し、アメリカも国家財政を大赤字にして国民生活を圧迫している。しかるにアメリカ政府は、沖縄を核基地として強化し、これをもって世界を支配しようとし、日本政府もこれに従っている。われら決起のときであろう。(協合理事)

裁判官たちだった。日本の裁判官には、被爆者として裏切られた思いだ。まさに、その恐ろしい核を持つ国の指導者たちによって、時代遅れの国際法も左右されている。核兵器廃絶は世界中のだれも願いだ。地球規模で、人類の平和を考える国際司法裁判所に早く生まれ変わってもらいたい。

八月六日、私は広島で開かれた「原水爆禁止一九九六年世界大会」に出席し、閉会総会の中で、ビキニ被爆者の苦しみを訴えた。そして、世界の被爆者が手をつなぎ、心も運動も一体となって世界の運動として発展させたいと発言した。この日、私は広島到着早々に啞然とする事であった。乗ったタクシーの運転手は、私たちが世界大会に参加する者と知ってのこと

だと思う。「被爆者という人たちは、被爆者手帳や、そのうえ月々三万円もの手当ても貰っている。その三万円を積み立てて海外旅行にしている(人もいる)んだから……」その言葉は、胸に突き刺さった。私たちも見舞い金をもらったとき、陰でさんざん言われた。そして、久保山さんですが、この妬みに一番悩まされてきた。四〇年以上も、核兵器の恐ろしさや廃絶を訴え続けてきても、実らない理由の一つを見た思っていた。しかし、そんな偏見や妬みの眼にいじけて、うじうじしてしまったらおしまい。平和運動も何もできやしない。命を取られた九人の仲間たちにも申し訳がない。私は、命あるかぎりその責任を追及し、訴え、平和を求めていくつもりだ。

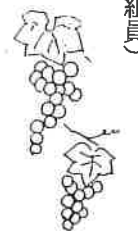
久保山さんには、被爆者の妻という立場なのに、その大きな妬みの渦にまきこまれながら一人で歯を食いしばり頑張ってくれた。病床に就いたとき、「私なんか話すより、実際にその重い体験をした福竜丸の乗組員の方がよほど適しているし、そうしてほしい」と本首をもらしたそう。またたくそのとおりだと思ふ。申し訳ない。しかし、こうも言ったそう。だ。「東京で大石さんが若い人たちが第五福竜丸展示館を訪ねる人たちに、ビキニの体験を話してくれていると聞いたときは、本当に嬉しかったですよ。重い肩の荷を半分降ろしたような気分でした。ほっとしましたよ」。

さいわい、東京・夢の島に第五福竜丸が残り、心ある人たちが大切に守ってくれている。そして、今は沢山の人が訪れ、ビキニ事件や水爆の恐ろしさを学んでいく。特に、これからの若い子供たちに、核兵器の恐ろしさを知ってもらおうよう微力ながら私もお手伝いしたい。最初は、何も知らないで来る学生たちも、話を聞いて皆びっくりする。そして、のめり込み行動に移す。グループからクラスへ、それが学級学校へと発展していく。最近出会った、神奈川県園中学校、山梨県女子短大の生徒たちもそのいい例だ。神奈川県園中学校の文化祭には沢山の著名人が集まった。核をテーマに第五福竜丸を取り上げたクラスの展示には、ワシントンポストの記者や、新聞テレビ、田中真紀子元科学技術庁長官の返事の手紙なども出ていた。しっかりと教育に対する先生の方向付けがあってそれは生まれてきている。親のしつけ、学校教育が平和を左右する大切な基だと思ふ。

【ご案内】  
九月二十三日(月・秋分の日)、第五福竜丸展示館でつぎのような催しがあります。ご参加下さい。  
●第五回平和を語る第五福竜丸の集い(第五福竜丸で平和を語る会主催)  
午前10時30分〜12時。午後1時30分〜3時の二回。お話、語り、

紙芝居、絵本読み聞かせ、コーラス、愛と平和の歌朗唱など。  
●第16回久保山忌句会(新俳句人連盟ほか句会実行委員会主催)  
午前10時、展示館集合、ビデオ「廃船」観賞、見学、句作。午後1時より句会と懇親会(江東文化センター)  
●96年九・二三第五福竜丸の集い

(東京原水協・江東区原水協主催)  
午前10時半、展示館集合、大石又七さんを囲む集い、展示館前広場で記念集会、講演、うたごえなど  
●久保山愛吉さんを追悼する会(平和と軍縮をめざす全国連絡会主催)  
学習集会を予定



核兵器と科学者

連載 21

核兵器と科学者

市民の大集会でウィーン宣言を発売

— バグウォッシュ会議の発足と発展(4) —

小川 岩 雄

「科学者は専門的知識があるもので、科学的発見がもたらす危険と約束にいち早く気付くことができます。ですから科学者には現代の最も差し迫った問題について発言する特別の資格と責任があるのです」

一九五八年九月二十日、オーストリアで開かれた第三回バグウォッシュ会議の最終日の午後、首都ウィーンの公会堂を埋め尽くしたおよそ一万人の市民を前に、湯川秀樹博士ら十人の高名な科学者がこどもも長文の宣言の要所要所を読み上げたとき、聴衆の熱狂的な拍手が会場を揺るがし、いつまでも鳴り止まななかつた。聴衆の最前列には終始熱心に耳を傾けるシェルフ大統領の姿があった。

自分たちの研究の成果が生み出した核兵器による人類破滅の危機を何とかして避けようと、努力を続けてきた科学者たちの熱い思いが、ついにこれほど多くの市民や

政治的指導者の共感と支持を得るまでになったことに、私たち会議参加者は深い感慨を覚えずにはいられなかった。

この第三回会議は、継続委員会のかねてからの方針に従い、第二回会議のように少数の主に核兵器国からの専門家だけで特定のテーマを掘り下げるのではなく、広く世界各国からできる限りの多くの科学者の参加を求め、核兵器の問題をはじめ科学の進歩がもたらしたさまざまな社会的問題について総合的、一般的な討論をしようとするものであった。また、会議の今後の運営や活動方針についても協議が行われた。

こうした大型の会議の開催に当たって先ず問題になったのは費用の調達だったが、幸いオーストリアのケルナー財団や米ソなど各方面の厚意で何とか解決し、二〇カ国から七十人の科学者(同伴の夫人などのオブザーバーやゲスト、事務

局員などを含めると一〇一人)が参加して、九月十四日から二十日まで、盛大に開催することができた。

会場には、夏は快適なリゾート地、冬は名門のスキー場として有名なチロルのキッツビュールのグランドホテルを借り切って十九日まで合宿した後、ウィーンに移り、古風なアカデミーの講堂で大統領やラッセル脚も参列して閉会式、その後公会堂で宣言の発表会を行った。

日本からは湯川、朝永両博士のほか、坂田昌一(理論物理学)、三宅泰雄(海洋化学)の両博士、および筆者の五人が参加したが、四博士はみな亡くなり、当時を語るには筆者一人となった。なお三宅博士はビキニ事件後、「死の灰」の調査や第五福竜丸の保存運動に献身的に尽力し、当協会の初代会長を長く務めた方である。

さて会議で予定されていた主な話題は、核兵器をめぐる現状の危険性とその危険を除去する方法、とくに東西間の緊張緩和の方法など、比較的限られていたが、実際に行われた討論の内容は、核戦争の結末、核実験による環境汚染、軍縮の技術的・政治的両側面、科

学時代を生きる道、科学技術での国際協力、科学者の社会的責任など、はるかに具体的に広範囲に渡っていた。

こうした討論や過去二回の会議の成果などを踏まえ、予め用意された声明文(「ウィーン宣言」)案が詳細に検討され、最終案がシラー博士を除く全員的一致で採択された。

余談だが博士は第一回以来「棄権博士」として有名なため、会期中に開かれた英国のパウエル博士の誕生日パーティーで祝辞を述べた代表が、「シラー博士を除く全員でお祝い申し上げます」と結んで大笑いになったりした。

ウィーン宣言はいわばバグウォッシュ運動の信条要義ともいえるもので、ラッセル・アインシュタイン宣言に基いて戦争の廃絶を訴えるとともに、核時代の科学者の責任を明らかにしている。

初秋の明るい日射しが躍る高原や芸術の古都で開かれた第三回会議は、家族同伴の参加者も多く、楽しい交歓の場ともなった。チロルの愛らしい民族舞踊やオペラ観劇など、思い出は尽きない。(立教大学名誉教授・協合理事)

一九九六年の夏に

大石 又 七

同僚久保山志郎さんの死を悼む

台風十一号が九州上陸をうかがっていた八月十二日夕刻、相良町の小塚 博さんから、あわただしい電話が入った。岐阜県の大垣市にいた久保山愛吉さんの甥・久保山志郎さんが亡くなったという知らせだ。「またか」「やはり」「くやしいなあ」何度こんな思いを繰り返さなければいけないのだ。第五福竜丸だけでも、これで犠牲者は二三人中九人になる。言いかげない寂しさと、哀れな仲間たちの人生を悼まずにはいられない。まるで私たち元乗組員は、仲間を送るために付き合ってきたようなもの。志郎さんも長いこと肝機能障害で苦しんでいた。私より三つ年上で六五歳。何年前にも放医研で一緒に検査を受けたことがある。その時は元気そうで、肝臓がんの俺のほうがきつと先にいくなと思っていた。

今年も広島では五、〇三〇人、長崎では二、六九一人という被爆

者が、公けの手で手厚く葬られた。

原爆被爆者は、被爆者援護法、被爆者手帳などでも守られている。なのにビキニ被爆者は何なんだろう。私たちも原爆被爆の八〇〇メートル距離の放射線を浴びせられたというのに、日米の政治決着で、私たちの方は四〇年前に後遺症も治り、すべて決着済みだともいうのだから。治ったというなら、その証しを私は知りたい。被爆の影響はないと言いながら国の予算でデータだけは取りつつけている。それでいて病気がみつかったも治療はしない。あまりにも勝手に無責任な仕打ちだと思ふ。発病は自分の不注意だなど言われて仲間たちは死んでいった。そんなばかな、被爆さえしなきゃ、このように九人も同じ病気で早死するはずがない。

志郎さんも、みなと同じように第五福竜丸で一年。被爆入院で一年二カ月というみじかい付き合いだったが、その後は被爆者として長い付き合いをしてきた。こここにいたって、残念このうえない

が、只々ご家族様へのおくやみと哀悼の誠を捧げ、安らかな眠りにつかれることを心から祈っている。

長崎へ、そして広島の世界大会へ

この夏、私は長崎と広島をあいっいで訪れた。七月一日、私は朝五時起きをして、迎いの車に乗せてもらい稲佐山に登った。遠く、山々の間を朝もやが流れ、そこには幽玄を思わせる静かな灰色の世界があった。眼下には、長崎の町がパノラマとなって横たわっていた。それは見事な絵画だった。沖には、小さな島々と共に軍艦島(端島)、手前湾口には、かつての軍国の象徴、戦艦武蔵などを生み出した三菱造船所も見えた。「山の中腹のあの小さな森、あの頭上五〇〇メートルのところ、原爆は炸裂したんです」長崎滞在中、私のそばですつと世話を下さった、長崎原水協事務局次長の古木泰男さんは言った。うっとりとして見とれていた景色は、一瞬にして地獄絵に変わり、あの日の人々の泣き叫ぶ声や、焼けただれ、さまざま姿が眼の奥に映った。

六月三〇日、私は焼津市主催の第五福竜丸六・三〇市民集会の招待状もきいていたが、長崎原水協の

まねきで羽田から長崎に向かった。学習講演会、長崎市役所表敬訪問、翌、一日には、平和公園祈念像まえから広島大会に向けての平和大行進出発式と、盛りだくさんの行事だった。なかでも記者会見には驚いた。九年前に長崎市に贈った第五福竜丸の模型船とも原爆資料館で再会した。その時、市長から頂いた感謝状のことまで、沢山の新聞テレビが報道してくれた。

私は、新しく作り替えられたという、立派な長崎原爆資料館を長い時間かけて見た。一部、日本の加害問題を扱ったところが閉められていたが、頭上で受けた原爆の惨たらしさ、知っていたつもりだったが、あらためてその凄さに鳥肌がたつた。

折しもオランダ・ハーグの国際司法裁判所が、核兵器使用に対する勧告的意見をだした。私は、これには大変不満だ。裁判官には、こういうところを先に見てもらおうべきだと思つた。核兵器は法律も地球も破壊してしまうというのに、鉄砲で戦う時代の考えかた。古すぎる。十四人の裁判官の中には日本人も加わっている。被爆国日本の惨状を訴えるには絶好の機会なのに、訴えたのは核を持たない国や、経済的に貧しい後進国の別の